

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 中世和歌史論 新古今和歌集以後

氏 名 村 尾 誠 一

本論文は、「中世和歌史論」という論題のもとに、中世における和歌の史的な展開を、作品や事象に即して論じたものである。それを通して中世和歌とは何であるかを把握しようと試みた論である。具体的には、本論の部分において、おおよそ十三世紀から十五世紀まで、歌人としては後鳥羽院から正徹までを範囲に考察した。

『新古今和歌集』において古典主義を基調とした様式が中世和歌の時代様式として完成し、その様式を基本としながら様々な問題を含みつつ展開した以後の和歌を、史的に把握して論述しようとしたものである。「新古今和歌集以後」という副題を添える所以である。方法については、特定の理論的な枠組みに依拠するのではなく、それぞれの時代の作品そのものや言説を読みこみ、それが何を表現しようとしているのか、述べようとしているのかを理解することを重視しながら、論述を進めることを基本にしている。

本論に先立ち「和歌史における中世—その始発期をめぐって」と題する序章を置いた。十二世紀において、源俊頼により示された、過去における膨大な和歌の蓄積を重荷として意識するという時代の課題の自覚を経て、その重荷を、規範性を持った資産として意識しその上に立つことで新たな創造を生み出そうとする古典主義の成立に、中世和歌の時代様式の成立を見据えた。歴史上の中世の始発期に、主として藤原俊成・定家の手により、その理念を様式として確立させて行く過程を考察した。

本論に入り、第一章「後鳥羽院における新古今和歌集とそれ以後」では後鳥羽院を中心に考察した。俊成・定家の確立させた古典主義を引き継ぎ自らの和歌様式を形成し、その

古典主義に基づく様式を時代様式として『新古今和歌集』という勅撰和歌集に開花させる中心となったのが院である。その意味でも中世和歌史の展開の上では、この歌人の存在は極めて重い。

第一節「後鳥羽院正治初度百首と勅撰和歌集への意志—『正治和字奏状』の再検討を発端に一」では、後鳥羽院が最初に主催した大規模な和歌会の成立過程を再考することで、院の勅撰和歌集編纂への意思形成の問題を問うた。院はその活動の始発から勅撰和歌集を意識していたことを明らかにした。第二節「建仁二年の後鳥羽院—歌風形成から中世和歌へ—」では、俊成・定家が確立させた方法を受け継ぎ、その成果をも参照しながら、短時間で時代にふさわしい歌人に成長した後鳥羽院の歌人形成の過程を考察した。第三節「建保期の後鳥羽院—藤原定家の本歌取方法論とのかかわりにおいて—」では、後鳥羽院の円熟期における作風を検討し、ディレクティブ的な側面を明らかにした。第四節「後鳥羽院と本歌取」では、時代様式を支える本歌取という方法への後鳥羽院の意識の一端を考察した。以上の節を通して、時代様式が完成した後に形成された後鳥羽院の歌人としてのあり方を考察し、『新古今和歌集』を実現させる主体の文学的な基盤を問うとともに、完成した様式を展開させる中世和歌の先駆的な存在としての後鳥羽院の姿を明らかにした。

歌人としての後鳥羽院には、生涯の最後の二十年を承久の乱の結末の流罪により、離島隠岐で過ごすという、和歌が前提としていた宮廷社会を離れた環境での文学活動という問題がある。最後の二節ではその問題を考察した。第五節「後鳥羽院御口伝の執筆時期再考」では、後鳥羽院の個性的な歌論書の執筆時期を隠岐配流以後と改めて考えることを通して、この歌論書のもつ問題を時代との関連で考察した。第六節「隠岐の後鳥羽院—遠島百首雑部の検討を通して—」では、その作品に即しながら、中世における歴史的な体験に直面し、都から離れて詠作することを余儀なくされた院の文学のあり方を問うた。

第二章「新古今和歌集直後の諸相」では、『新古今和歌集』完成直後の和歌の状況について問うた。その編纂が一段落した十三世紀初頭のこの時期は、その代表的な年号から「建保期」と呼ばれる場合がある。一つの輝かしい達成の終わった、やや弛緩した垂流の時代と位置付けられることが多い。しかし、この時代を、後に長く続いて行く和歌史的状况の最初の時代と位置付け、論を展開した。

第一節「建保期の歌壇と藤原定家」では、様式の完成者である定家とこの時代の歌壇との関わりを論じた。第二節「新古今和歌集直後の和歌表現の一側面—土御門院百首を中心に—」では、時代の主流的な活動からは隔絶された存在が、時代様式を纏う様子を考察した。第三節「新古今和歌集直後の和歌の諸相に関する試論」では、この時期の和歌表現のあり方を、時代の随伴者である藤原範宗の詠作活動、その時代の指導的立場となった定家の批評活動、その時代の宮廷歌壇の主催者である順徳天皇の歌論から問うた。さらに、第四節「新勅撰和歌集論のために—花実論という視座—」では、その時代の後に編纂された『新勅撰和歌集』について、『新古今和歌集』との差違を語る言説である花実論に注目し、

時代様式の確立期と継承期とのあり方の違いを論じた。

第三章「二条為世の時代」では、二条為世を中心に、主として十四世紀の問題を考察した。古典主義が守旧主義と化して、保守本流を自認する二条為世等により継承されると考えられている時代である。その中で生成する表現の活力を見ようとする意図でのものである。また、この時代には守旧主義に対立するものとして京極派の革新主義が注目されるが、対立よりもむしろ、為世和歌への影響や、時代の様式としての広がりの方に注目した。

第一節「二条為世試論」では、勅撰集撰者をつとめる時期の完成期の為世の表現と方法を問うた。第二節「初期二条為世論」では、初期の歌風形成期の為世について考察した。この両論を通して見えてきた京極派的なものとの接点について本格的に論じたのが第三節「中世和歌における京極派的なるもの—二条派和歌との接点からの試論—」である。そこでは、京極派的な革新的な歌風が、十四世紀における時代様式としての広がりも持つという把握を試みた。

第四章「勅撰和歌集の終焉期」では、勅撰和歌集が終焉を迎える十五世紀の問題を考察した。すでに自ら注釈を行った最後の勅撰和歌集となった『新続古今和歌集』の問題から始まり、従来十分論じられてこなかった勅撰和歌集の終焉という問題を考察した。また、この時代の特異な個性の歌人として注目される正徹についても論じた。特に、歌人として十分成熟しながらも勅撰和歌集に入らずに終わってしまった問題を集中的に論じ、勅撰和歌集により歌人が評価される時代から、そうした権威が失われる時代への結節点として考察した。

第一節は「新続古今和歌集」として、必ずしも一般的に注目されていない最後の勅撰和歌集についての概説を置いた。第二節「新続古今和歌集のなかの文学史—ふたつの宇津山—」では、撰者となった雅世の家である飛鳥井家代々の歌人達の作品を考察しながら、この歌集が古典主義の連鎖の中にあることを明らかにした。第三節「勅撰和歌集の終焉」では、挫折した二十二番目の勅撰和歌集に関して、撰者に下命された飛鳥井雅親に注目して、その挫折の様相を問い、応仁の乱が勅撰和歌集の終焉の直接の原因ではあるが、和歌史の内部にもその要因が存在することを明らかにした。

以下、『新続古今和歌集』の撰にもれた正徹について論じた。第四節「正徹と新続古今和歌集」では、この歌集の実質的な推進者である足利義教の忌避により撰入されなかったとされる、よく語られる見解に対して、落撰直後や、勅撰集撰集期の正徹の有様を考察することで、その期待と絶望の様を明らかにするとともに、勅撰和歌集の世界から遠い正徹の社会的なあり方も考察した。第五節「正徹和歌の特質—『前摂政家歌合』を視座に—」では、公家中の公家である一条兼良が主催し判詞を書いた歌合を中心に、正徹の公家的な世界からの逸脱の様子を考察した。第六節「正徹と新古今和歌集」では、中世和歌の始発となった勅撰和歌集と正徹との関係を考察し、彼に向かう和歌伝統の多様性について考えた。最後に第七節「残照の中の王朝的世界」では、正徹を視座に、十五世紀という時代にあっ

て、王朝的な世界を継承しながらも、その世界の捉え方が、本来あったはずのあり方から変質している様を論じた。

本論を承けて、十六世紀とそれ以後への展開を視野に、和歌史における中世の終焉の問題を考察したのが終章「和歌史における中世—その終焉をめぐる」である。応仁の乱以後の状況を正徹の弟子の正広の活動から考察することからはじめ、和歌史の上での十六世紀の位置付けや、明治期までを視野に入れて古典主義の行方の問題を論じ、徳川幕府の成立に至るまで、和歌史の中世の終焉の問題をオムニバス式に論じて、全体を閉じた。

以上、古典主義を基調としながらも大きな振幅で作品が作られ続ける中世における和歌の展開の、通史的な見通しを立てることを意図したのが本論文である。